

大奥

2006(平成18)年12月21日鑑賞(東映試写室)



監督＝林徹／出演＝仲間由紀恵／西島秀俊／井川遥／及川光博／杉田かおる／鷺尾真知子／山口香緒里／久保田磨希／松下由樹／浅野ゆう子／高島礼子（東映配給／2006年日本映画／125分）

……2006年末の大奥絵巻は、映画はもちろん、大河ドラマ、コマーシャルに2006年トップの顔となった仲間由紀恵が主人公。大奥史上最大のスキャンダル「絵島生島事件」は、月光院派 vs. 天英院派の女の闘いの悲惨な結末だが、さてその真相は……？ アツと驚く将軍生母と側用人との道ならめ恋も悩ましいが、何とんでも大奥総取締、絵島の純真で一途な愛が見どころ。他方、その愛を信じ、磔で息絶える生島の最後の微笑みは、まさに男の美学……？

2006年は仲間由紀恵イヤー

最近私が最も注目している女優は宮崎あおいだが、2006年の日本を代表する女優は、何とんでも仲間由紀恵。昨年の『紅白歌合戦』に続き、今年の大晦日も2年連続で紅組司会の大役をつとめることに……。NHKの大河ドラマ『功名が辻』も1年間高視聴率をキープしたようだし、テレビや映画そしてコマーシャルでの活躍も絶好調。仲間由紀恵イヤーとなった2006年の最後を飾る大作がこの『大奥』。そんな彼女が演ずるのは、下町育ちながら、若くして大奥総取締の重職を占めている絵島。絵島は、6代将軍徳川家宣いえのぶの側室で7代将軍徳川家継いえつぐの生母、月光院（井川遥）から厚い信頼を寄せられているが、次に述べるように月光院と絵島の周りは敵だらけ。こりゃ大奥総取締という役職も大変だ……。

大奥の勢力図は……？

6代将軍家宣の正室ながら子供を早世させたのが天英院（高島礼子）。したが

って天英院から見れば、子供を産んだだけで7代将軍の生母となった月光院が憎いのは当然……？ さらに、月光院以外にもたくさんいる6代将軍の側室、法心院（木村多江）や蓮浄院（松下由樹）らも月光院を憎むことにかけては誰にも負けないよう……。このように月光院と絵島を憎しと思う派閥は、天英院を中核としてたくさんあるから、その派閥の長をはじめとする部下たちの、月光院派とその部下たちに対するいじめは陰湿きわまりないもの……。

中でも憎たらしいのは、実生活においても日産コンツェルンの創始者鮎川義介の孫である鮎川純太（株式会社テクノベンチャー会長兼社長）との結婚と電撃離婚などで何かと話題を振りまいた杉田かおる扮する、天英院直属の女中宮路。彼女を筆頭とする意地悪そうな天英院派の面々と違い、いかにも人が良さそうな月光院派の女中が藤川（中山忍）や小萩（麻生祐未）だが、物語が進むにつれて、彼女たちも少数派閥に属した悲哀を味わうことに……。

幕府の実権は……？

大奥の勢力図は圧倒的に「天英院派＞月光院派」だが、当時、幼少の7代将軍の後見人的役割を果たし、幕府の実権を握っていたのが側用人そばようじんの間部詮房（及川光博）。側用人というのは江戸幕府の役職名で、将軍の側近としてその命令を老中らに伝えるのがお役目。5代将軍綱吉の時代の柳沢吉保が側用人として有名だが、これは側用人が老中よりも強い権力を握り、「側用人政治」を行ったため。

7代将軍の側用人間部は、能役者から立身出世してきた人物だから、幕府本来の重臣たちの反発を買っていたのは当然。その筆頭が老中の秋元喬知（岸谷五朗）だが、間部への幼い将軍からの信頼が厚い以上如何ともし難いから、いつも切齒扼腕……。

追い落としにはスキャンダルが1番……

安倍内閣発足後、総理の肝入りで実現したのが、財務省が推す石弘光氏を押し退けての政府税制調査会への本間正明会長の就任。「上げ潮」路線と軌を一にする法人税減税の方針に反本間陣営や政府税調の面々が抵抗し、あたかも小泉内閣における竹中平蔵氏の役割を、安倍内閣において本間氏が担おうとしていた。と

ころが、そこに突如降って湧いたのが、国家公務員宿舎に知人女性と同居していたというスキャンダル。報道されたような事実があってはならないのは当然だが、この時期にこんなスキャンダルが表面化し、遂に本間会長が辞任に追い込まれたのは、明らかな反本陣によるリーク……？

こんなスキャンダル探しは、権力争いの現場ではいつの時代にもあるもので、間部の場合のそれは、何と7代将軍の生母、月光院との道ならぬ恋……。

興味深い歌舞伎役者の地位……

数千人の女たちが生活する大奥へ入ることができる男子は将軍ただ1人。したがって、大奥の女たちが「男日照り」になるのは当然だが、この映画を観てはじめてわかったのは、徳川家康から秀忠、家光と続いた徳川幕府創生期の女傑、春日局が君臨していた大奥では、その規律が厳しかったものの、6代、7代将軍の時代になるとそれが緩み、何かと口実を設けては大奥の女たちも娯楽に出かけるチャンスが増えていたということ。そんな場合、女たちの最大の楽しみは芝居見物。そして、人気の歌舞伎役者たちは、表の顔は役者ながら、裏では大奥の権力者たちに金で買われる男妾あるいはホストの役割を……。

今年大人気となったテレビドラマの1つがホストの世界を描いた『夜王』だったが、7代将軍の時代にナンバーワンホストの地位を占めていたのが、歌舞伎座・山村座の看板役者、生島新五郎（西島秀俊）。芝居は芝居、女性のお相手はお相手と割り切った彼のクールなカッコ良さに、まずは脱帽……。

絵島生島事件のお勉強を！

「大奥」と言えば、男でも女でも、絢爛豪華な大奥絵巻と、将軍をめぐる正室、側室たちが入り混じった嫉妬心を軸としたすさまじい権力争い絵巻がお楽しみ……？ しかし、本当の大奥を知るためには、そんな週刊誌的な興味だけではなく、れっきとした歴史上の事実として、大奥最大のスキャンダル「絵島生島事件」を勉強しておく必要がある。

パンフレットによれば、1714年に起こったこの事件は、絵島が月光院の名代として前6代将軍家宣の命日に増上寺へ参詣し、その帰りに芝居見物をした後、生

島らと酒宴におよび、門限に遅れてしまったという不祥事。この事件の真相がどこまで明らかにされているのかは知らないが、この映画では、それまで少しずつ互いの愛を感じていた絵島と生島が、芝居小屋炎上という大事件の後、はじめてその愛を確認し合うというラブストーリーの中で描かれていく……。

スキャンダルはつくり出すもの……

月光院と間部との道ならぬ恋は、どこかで証拠を掴まなければ間部を追い落とすネタにはならないもの……。これに対し、大奥総取締の役目を完璧にこなしている絵島は品行方正で非の打ち所がないから、それを追い落とすには無理矢理スキャンダルをつくり出さなければならない。そこで、天英院が一計を案じたのが、絵島の男スキャンダルをつくり出すこと。そしてそのお相手として選んだのは、もちろんNo.1ホストの生島……。生島は大奥の女たちの扱いにかけては当代No.1であるのに対し、絵島は女盛りでありながらまだ男も恋も知らないという純真でウブな女。したがって、絵島を「落とす」ように命じられた生島にとって、それは一見楽しくかつたやすい仕事のように思えたが……。

企みは思わぬ展開に……

この年になるまで男を知らないという設定には多少違和感があるが、清純派(?)の仲間由紀恵なればこそ、そんな絵島の役柄を切々と……。面白いのは、そんな「女の純情」を目の当たりにして揺らぐプレイボーイの自信。つまり、それまで女はすべてお仕事の対象であったはずのNo.1ホストの生島が、あろうことか本気で絵島にホレてしまったということだ。芝居見物の後、2人は寝たのかそれとも寝ていないのか、密通の有無をめぐって大奥と幕府中枢が大騒動の中に……。

自白は証拠の王だが……

終戦後の憲法と刑事訴訟法によって、「自白のみで有罪にすることはできない」という原則が確立されたが、明治時代はもちろん、徳川時代においては自白は証拠の王……。したがって、芝居小屋炎上の後、2人はどこで何をしていたのか……？　そこで、生島に対しては「お前は絵島と寝たであろう。白状せよ！」と

の厳しい取調べ（拷問）が……。当代一の色男、No.1ホストとして君臨していた生島にとって、牢の中での厳しい責め苦に耐えるのは大変だが、彼が最後まで自白しなかったのは、果たしてなぜ……。それは、絵島が生島に対して示した「女の純情」に対する「男の純情」……。？

結局、生島は最後まで絵島との密通を自白しなかったため、絵島の罪も減じられ、大奥から追放、〇〇藩預かりとされたが、一介の民間人である生島に対しては死罪＝磔の刑が執行されることに……。それを知った絵島が最後の願いとして申し出たのは……。？ 磔によって死んでいく生島が最後に微笑んだのは、絵島の姿を目の当たりにしたせい……。？ そして微笑んだ顔での死にざまは、No.1ホストとして、また絵島への純愛を貫いた男として最後に示す男の美学……。？

「瓦版」の宣伝効果は……。？

12月23日から全国東映系で公開される『大奥』は、東映の威信をかけた大宣伝を展開している。中でも、12月22日付毎日新聞の一面全部を使った「大奥地獄耳瓦版」は超異色で、面白い宣伝。その大見出しは「大奥史上最大の醜聞 大奥総取締・絵島 歌舞伎役者と密通か?!」と「女の園に吹きまくるバワハラ嵐」というもの。そして小見出しは「えっ、まさかあの人か?!」「純愛かそれとも策略愛か お相手・生島新五郎は『今は何も話せない』』というもので、「絵島生島事件」のスクランダラスな一面を、いかにも瓦版らしく鋭く切り取っている。この瓦版を読んだ多くの読者は先を争って映画館へ駆けつけてくることまちがいなし、となれば大成功だが……。？

衣装代だけでも1億円以上、美術セットだけでも1億円以上という膨大な製作費を回収できることは、この映画がフジテレビとの共同製作であることを考えれば、ほぼ確実……。？ しかし、2006年に50億円以上の興行収入をあげた邦画は、『ゲド戦記』『LIMIT OF LOVE 海猿』『THE 有頂天ホテル』『日本沈没』『男たちの大和／YAMATO』『DEATH NOTE the Last name』の6本。相変わらず東宝の「一人勝ち」状態が続く中、東映としては2007年も『男たちの大和／YAMATO』に続いて、1本くらいは50億円以上の興行収入をあげたいところだが……。

2006(平成18)年12月26日記